

一冊の文庫本

青来 有一

宮沢賢治の童話を読んだのは、十七歳の頃だった。高校二年生。大人になりかけの年齢だ。十七歳にもなればからだはすっかり骨ばって、髭も生え、声も太くなる。からだの変化に心がついていけない。ようやく、からだの変化を追って、心がぎしぎしときしみながら、かたちを変えていこうとするぐらいの年齢だ。見た目には、童話を読むには、ちょっとばかりむさくるしい姿だったかもしれない。

宮沢賢治の「雨ニモマケズ」という詩は、小学校の教科書に掲載されていた。授業で暗唱させられたのでだいたい覚えていた。

「雨ニモマケズ」というこの詩（ほんとうは手帳に記入したメモのようなものらしい）は、だれもいちどくらいは読んだことがあるかもしれない。

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

慾ハナク

決シテ瞋（イカ）ラズ

イツモシヅカニワラツテキ（イ）ル

最初からこのあたりまで、ずいぶんと立派な人をほめたたえた詩かと思ったが、ずっと読んでいくと最後はこんなふうにむすばれている。

ミンナニデクノボートヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイフモノニ

ワタシハナリタイ

「そういう者にわたしはなりたい」という最後の二行の願いは、詩のいちばん頭から終りあたりまで全編にかかっている。

雨にも、風にも、夏の暑さにも負けない人間になりたいというのはわかる。丈夫なからだをもちたいと願うのは、だれだってそうだろう。でも、デクノボーと呼ばれて、誉められもしないで、苦にもされない人間になりたいとは、いったいどういうことなのか。

宮沢賢治とはどんな人だったのか。

ずっと心の中にそんな疑問はかかえていたような気がする。疑問というよりも、興味だろうか。とにかく宮沢賢治という名前はなんとなく胸にひっかかっていた。でも、心の準備がまだだったのか、あいまいなまま時は流れていった。

中学生になり、高校に進学した。だんだんと本を読むようになったのは、やはり、心がぎしぎしきしみながら成長していこうとしていたのだろう。からだの成長のためにはバランス良く食べて、運動をしなければならぬ。同じように、心の成長にも栄養と運動が必要だ。たぶん、読書は心の運動であり、活字は心のごはんでないか。しかも、いくら食べてもなくならない。本はなかなかお得な栄養源ではあるのだろう。

高校二年生のある放課後、学校帰りに立ち寄った書店の棚にならぶ文庫本の背表紙に「宮沢賢治」の名前を見つけた。なにか、ぴぴんと感じた。その本が童話を集めた本だとはあまり意識はしていなかった。

文庫本の表紙には、「銀河鉄道の夜・風の又三郎・ポラーノの広場　ほか三篇」と作品名をならべただけである。「宮沢賢治童話集」とか、「作品集」とか、本そのものの題名はない。どこことなくそっけない。ただ、カバーの絵の感じがすてきだった。緑色がかかった藍色の中に、星や月らしきものが点々とちらばっている。

ぱらぱらとページをめくってみると、登場人物の名前が、ホモイだの、ジョバンニだの、カンパネルラだの不思議な響きである。物語の中の地名も、イーハトーヴォとか、モリーオ市だ

の外国のように思える。なかなかおもしろそう。「銀河鉄道の夜」も「風の又三郎」も題名は聞いたことがあったが、それまで読んだこともなかった。値段は二四〇円。三十年以上前の当時の高校生のこづかいでもまあなんとかなる。さっそく買って帰り、自宅で読み始めた。

言葉づかいはやわらかい。ひらがなが多く、子どもに語りかけるような語り口は、童話だから当然なのだろう。ただ、高校二年生の胸にも、しんしんと沁みってくる孤独感がある。澄んだ寂しさがある。それから、せつないくらいに一途で純粋な願いが胸をうつ。

「銀河鉄道の夜」では、なんといっても賢治の想像力に驚かされた。一冊の小さな文庫本の中で、重いはずの汽車が宙に浮かんで、銀河をめぐる宇宙空間をがたと走っているではないか。

銀河鉄道をめぐった主人公のジョバンニは、友だちのカンパネルラと一緒に幸せを探しているように呼べる。

「僕はもうあんな大きな暗（やみ）の中だってこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう」

なんという熱い友情の呼びかけであろうか。透きとおった美しい決意であろうか。しかし、友だちのカンパネルラは汽車の中から消えてしまう。現実には川で溺れて死んでしまうのだ。ジョバンニはひとり唇をかみしめて、壮麗な銀河を仰ぐしかない。

そこには、まわりのひとからデクノボーと呼ばれることを願った賢治の寂しさがぼんやりと重なっているようだった。誉められもしないで、他人から苦にもされない人間になりたいと願

う、慎ましい賢治の胸の奥にひろがる壮大な宇宙とそこに存在している人間の孤独を感じるこ
とができた。

それでも、宮沢賢治という人は、ひとつの大きな謎であることには変りはない。いや、謎
はますます深まっていった。

文庫本というのは、巻末にたいしては詳しい解説がついている。時には年譜も掲載されてい
て、たとえば、宮沢賢治がいくつの時になにをしたか、およその一生をたどることができる。
この文庫本にも年譜がついていた。宮沢賢治が自分と同じ十七歳の時になにをしていたのか、
すぐにわかる。

大正二年 一九一三年、宮沢賢治、十七歳。どんないきさつかはわからないが、寄宿舎から
追放されたところ。北海道修学旅行に行っている。ロシア文学を読んでいる。最後にさりげな
く、「この年も東北地方は記録的冷害、凶作」とつけくわえられていた。

解説は、天沢退二郎という詩人としても知られた方である。賢治の生涯と文学が、「宮沢賢
治とは誰か」と題して詳しく紹介されている。農芸化学者で、農学校の教師で、詩人であった
賢治。科学者の精神と詩人の心をもっていた賢治。しかし、心の奥底には、東北地方の凶作に
苦しむ人々の姿に心を痛め、みんなの幸福を願い求める宗教者の魂も宿していたようだ。

宮沢賢治とはなんとも複雑で、深い宇宙をまるまる胸に抱いている人だったらしい。

高校二年生、十七歳の未熟な心は、そんな興味がだんだんと深くなっていき、文庫本の童話

だけでなく、解説や年譜もふくめて、なんどもくりかえして読んだ。

宮沢賢治と彼をめぐる言葉を、毎日、毎晩、もぐもぐと食べ続けたのだ。

あれから三十年以上が過ぎた。あの文庫本はいったいどうなったか……。

実は今も手元にある。

表紙の色は変って、だいぶ古びたが、時々、まだ読み返してもみている。

宮沢賢治という人はいまだに謎だ。詩人とか、農芸化学者とか、教師とか、肩書きだけでは
推し測れない深淵をかかえた人だ。その人が誰であったのか、すっきりと理解した気にはなら
ない。それどころか、ますます謎は深まってきているように思える。うっかり宮沢賢治という
深淵をのぞきこんだばかりに、もう、眼をはなすことができなくなったのかもしれない。

ただ、十七歳で宮沢賢治の本に出会ったことはとても幸運だった。宮沢賢治そのひとの存在
を知ったというだけでなく、三十年以上もくりかえして読むことになる書物に出会えたことが、
なによりも幸運だったと思う。

優れた書物は、子どもの時も、大人になっても、いろんなふうに読むことができる。それぞ
れの年齢に応じて、どんどん深くなっていき、読むたびに新しい発見がある。同時にいろん
な謎を問いかけてくる。

そんな書物が、かたわらに一冊でもあれば人生はとても豊かになる。